



**Data**

総合監修: 是枝裕和  
 監督・脚本: 早川千絵/木下雄介/  
 津野愛/藤村明世/石川慶  
 出演: 川口寛/山田キヌヲ/牧口元  
 美/美谷和枝/國村隼/大  
 川星哉/辻村羽来/中野龍  
 /杉咲花/田中哲司/前田  
 旺志郎/三浦誠己/池脇千  
 鶴/三田リリヤ/田畑端志  
 真/太賀/木野花

## 👁️👁️ みどころ

香港版『十年』では“表現の自由”をめぐる政治的問題が重要テーマになっていたが、日本版『十年』のテーマは？そこに見る5つの近未来はそれぞれ興味深いが、“10年後”と設定されると、なるほど、こういう風に！

他方、是枝裕和監督は①脚本のクオリティ②オリジナリティ③将来性を重視して5作品を選んだが、各作品の問題意識の鋭さは？その結末は？誰も明るい10年後の日本を描かなかった（描けなかった？）のは残念だ。また、たとえば、復活した徴兵制の下であなたはどうするの？と真正面から問題提起できなかったのも、実に残念。

私にはそんな不満があり、いろいろディスカッションしたいが・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■香港版『十年』から台湾版、タイ版、日本版が！■□■

私は香港版『十年』(15年)を見逃したが、同作は大ヒットし、日本、タイ、台湾の協同プロジェクトとしてそれぞれの国の10年後を描く『十年』(日本版)『十年』(タイ版)『十年』(台湾版)の企画が決定した。本作は、是枝裕和監督が企画し、脚本のクオリティ、オリジナリティ、将来性を重視して選ばれた5人の新鋭監督たちが“5つの未来”を描く日本版だ。5人の若手監督たちはそれぞれ、日本が抱えている今の問題をどう考え、これからの私たちの未来をどう描いているのだろうか。

## ■□■5つの短編のタイトルは？そのテーマは？■□■

チラシを引用すると、その“5つの未来”短編のタイトルとその内容は次のとおりだ。

### ①<『PLAN75』早川千絵監督×川口寛>

高齢化問題を解決するために、75歳以上の高齢者に安楽死を奨励する国の制度『PLAN75』。公務員の伊丹（川口寛）は、貧しい老人達を相手に“死のプラン”の勧誘にあっている。一方、出産を間近に控えた妻・佐紀（山田キヌヲ）は認知症の母親を抱え途方に暮れていた。

### ②<『いたずら同盟』木下雄介監督×國村隼>

AIによる道德教育に管理された国家戦略IT特区の小学校。AIシステム“プロミス”に従えば、子供たちは苦しむことがない日常を過ごすことができた。ある日、用務員の重田（國村隼）が世話をする老馬にプロミスから殺処分の判断が下され、反抗する亮太（大川星哉）はいたずらを画策する。

### ③<『DATA』津野愛監督×杉咲花>

母の生前のデータが入った「デジタル遺産」を、父（田中哲司）に内緒で手に入れた女子高生の舞花（杉咲花）。幼馴染の隼人（前田旺史郎）に協力してもらい、データをもとに母の実像を結ぶことに喜びを感じていたが、ある知られざる一面を見つけてしまい……。

### ④<『その空気は見えない』藤村明世監督×池脇千鶴>

放射能による大気汚染から逃れるために地下の世界に住む少女・ミズキ（三田りりや）。「地上の世界は危険」という母（池脇千鶴）の教えを守り、地下の暮らしに何の疑問も持たずにいたが、友人のカエデ（田畑志真）から地上の話を聞き、まだ見ぬ世界への強い憧れを抱くようになり……。

### ⑤<『美しい国』石川慶監督×太賀>

徴兵制が施行された日本。広告代理店の社員・渡邊（太賀）は、徴兵制の公示キャンペーンを担当している。ある日、ポスターデザインを一新するという防衛省の意向を、ベテランデザイナー・天達（木野花）に伝えるという大役を先輩社員に振られてしまい……。

## ■□■近未来は想像の世界。しかし十年後は？■□■

映画では自由な“想像”と“創造”が可能だからさまざまな“近未来”をいろいろ“想像”し、それを監督独自の世界観で自由に“創造”して観客に提供することができる。私が大好きな『宇宙戦艦ヤマト』シリーズや『猿の惑星』シリーズはその代表的な作品だ。

『シネマルーム』掲載の映画には、そんな“近未来モノ”はたくさんある。例えば『アフター・アース』（13年）（『シネマ31』252頁）は1000年後つまり3071年の地球を描いていたし、『オブリビオン』（13年）（『シネマ31』未掲載）は60年後の地球を描い

ていた。また、韓国のポン・ジュノ監督の世界観を反映した面白い映画が『スノーピアサー』(13年)、『シネマ 32』234頁)だったし、『メランコリア』(11年)、『シネマ 28』169頁)も『テイク・シェルター』(11年)、『シネマ 28』174頁)も興味深い映画だった。さらに、現在世界中の人々が注目しているA I (人工知能)を巡っては、『エクス・マキナ』(15年)、『シネマ 38』(189頁)が、女優アリシア・ヴィキャンデルの美しさと共に興味深い映画だった。

それらの“近未来”に対して、“十年後”と時期を設定されると、それはある意味では想像の世界だし、ある意味では現実の世界の延長線から、どんなテーマをどう設定するかが難しい。香港版、日本版、台湾版、タイ版はそれぞれで若手監督たちの興味の持ち方がそれぞれ違って当然だ。香港版の、①『エキストラ』②『冬のセミ』③『方言』④『焼身自殺者』⑤『地産の卵』については、「北京政府の統制が強まる圧迫感で息が詰まりそうになる未来図だった。」と批評されていた。また台湾版は、①『悪霊缶頭』②『942』③『路半』④『蝦子』⑤『睏眠』の5作品だが、そこでは台湾特有の先住民族の物語や、台湾の人と結婚して台湾に移り住んだ海外籍の人である「新住民」の問題が含まれていたらしい。

しかして、日本版の5つの作品のそれぞれの問題意識は？以下1つずつ評論していく。

## <PLAN75>

◆現在『ガンジスに還る』(16年)が公開されているが、これはインドの老人問題をテーマにした映画だ。少子高齢化、医療費高騰、社会福祉費の増大は大問題だから、本作のように、75歳以上の老人に安楽死を勧める政策は一見合理的？しかして、その運用は・・・？

◆浅丘ルリ子をはじめ、かつて銀幕をかざった華やかな女優たちが総出で老婆役を演じた『デン德拉』(11年)では、姥捨て山行きは70歳からだったが、なんとそこには草笛光子が演じる100歳の大ボスもいた(『シネマ 27』187頁)。

今村昌平監督の『楡山節考』(83年)は悲しい映画だったのに対して、その長男である天願大介が監督した『デン德拉』はアクション満載で、面白かった。しかし、その分、姥捨て山の是非論と、老婆たちによる復讐の是非論という視点が後半かなり薄まってしまったのは残念だった。

◆それに対して『PLAN75』では、75歳以上の男女の安楽死を推進する国の制度が発足する中、それを奨励する若い主人公伊丹(川口寛)の苦悩がテーマになる。伊丹は公務員として“死のプラン”の勧誘をすることに何の抵抗もないようだが、出産を控えた妻佐紀(山田キヌヲ)の母親の認知症が進んでくると、彼女に対する勧誘は・・・？

## <いたすら同盟>

◆将棋では、まだ人間がA I (人工知能)より強いが、囲碁の世界ではすでにA Iは人間を凌いでいる。また、A Iが登場すれば、弁護士のようないわゆる“士業”も軒並みアウ

トになるらしい。しかし、「十年後」の、国家戦略IT特区の小学校で使われているAIシステム“プロミス”とは？これはAIによって道徳教育を管理するもので、“プロミス”の指示に従いさえすれば、子供たちは苦しむことがない日常を過ごすことができるという“すぐれもの”らしい。ところが、ある日、用務員の重田（國村隼）が世話をする老馬にプロミスから殺処分の判断が下されると、これに反抗する亮太（大川星哉）は・・・？

◆子どもの教育には良いことを褒めてやる一方、悪いことをすれば叱ることも必要。そう考えている“プロミス”は、子供たちが“プロミス”の指示に従わず反抗しそうになると、“ある処罰”を与えて子供たちの反抗を阻止していた。そのため、奴隷たちがローマ帝国に対して反抗できなかったのと同じように、子供たちは、“プロミス”に抵抗できなかったが、ローマ帝国で“スパルタクスの反乱”が起きたのと同じように、亮太が起こした反乱とは・・・？

◆本作はその“反乱”までを描き、反乱が成功した後の結末を描いていないが、さて“亮太の反乱”も“スパルタクスの反乱”が鎮圧されてしまったのと同じような結果になってしまうのだろうか？

## <DATA>

◆高齢化が進む日本では、法律の世界でも“所有者不明土地”の問題が大きくなり、“不動産”が“負債”に化けるケースが増えている。また“就活”ならぬ“終活”という言葉が定着し、遺言のススメはもとより“生前葬”を含め、生きていた間にいかに遺品の整理をしておくかが老人たちの重要なテーマになっている。しかし、“10年後”には生前のデータが入った“デジタル遺産”が登場しているというのが本作の設定だ。

◆お母さんも若い時は美しかったはず。したがって、母の生前の“データ遺産”を父（田中哲司）に内緒で手に入れた女子高生の舞花（杉咲花）が、その中味に興味を持ったのは当然。そのため幼なじみの隼人（前田旺史郎）に協力してもらって“データ遺産”の中に入り込み、母親の“実像”を結んでいると、何と若き日の母親には父親とは違う別の男性の姿が……。しかも、その二人はかなり親密かつ濃密な関係に……。すると、私は誰の子供？ひょっとして、私の父親はあの男性……？

◆本作では、舞花の「私は娘だから母親の秘密に入り込む権利がある！」との主張をめぐる父娘の論争に注目！それは法的にはおかしいが、頭ごなしにそれを言っても舞花には理解できないはず。したがって、本作ではやさしく娘の行動を見守る父親の視点から娘の言い分と行動を観察しながら、父娘の論争の行方を見守りたい。たまたま本作では結果オーライで事なきを得たが、展開の仕方如何によっては大荒れになる危険も……。

## <その空気は見えない>

◆原発事故をテーマにしたドキュメンタリー形式の問題提起作は多いが、劇映画でも、園

子温監督の『ヒミズ』（12年）『シネマ 28』（210頁）や『希望の国』（12年）（『シネマ 29』37頁）があるし、キム・ギドク監督の『STOP』（17年）（『シネマ 40』265頁）等の名作がある。また、『故郷よ』（11年）は、“007女優”のオルガ・キュレリンコを登場させた素晴らしい人間ドラマだった（『シネマ 30』205頁）し、私の大好きな杉野希妃がプロデュースし、内田伸輝が監督した『おだやかな日常』（12年）も『ヒミズ』や『希望の国』と同じように手厳しいもので、東京に住む二組の夫婦の妻たちがなぜ放射能汚染をこんなに恐れるのかをトコトン問い詰めていた（『シネマ 30』209頁）。さらに『太陽』（16年）は、①ウイルスの感染を克服し、心身ともに進化したけれど、それと引き換えに太陽の下では生きられない体質になってしまった新人類のノクスと、②太陽の下で自由に生きられるものの、ノクスに管理されることで貧困を強いられている旧人類であるキュリオ、の世界に人類が分断されてしまった近未来を描く面白い映画だった（『シネマ 38』184頁）。このように“近未来”の放射能汚染の描き方はいろいろだが、本作が描く10年後の放射能に汚染された日本は？

◆一人娘のミズキ（三田りりや）をその母親（池脇千鶴）が“地下の世界”に閉じ込めているのは、“地上の世界”は放射能による汚染で危険なためだ。ところが、“親の心、子知らず”とはよく言ったもので、ミズキは一風変わった友人カエデ（田畑志真）から地上の話を知ると、次第にまだ見ぬ世界へのあこがれを抱くようになったから、アレレ……。カエデが勝手に一人で地上の世界に入って行けば、一体どういうことに……？

◆2018年の日本の夏は異常に暑かったから、日本人はそれにゲンナリしていたが、それだって地上の世界にいるからこそわかるもの。もし、地下の世界に閉じ込められて、暑さ寒さはもちろん、太陽の光も風も雨も知らない人間になってしまうと……？

◆原発事故が発生すれば大変な被害が発生し、それが長期間かつ広範囲にわたって影響を及ぼすことは明らかだ。すると、それを発生させないためにはどうすればよいかを考え行動しなければならないが、本作を観ていると、藤村明世監督が考える日本の“10年後”は悲観的だ。しかし、神様から与えられた人間の特技は“想像すること”だから、本作のような10年後を想像し、そうならないための政策を今の私たちがしっかり作っていかねばならない。本作を観て、そのことをしっかり肝に銘じたい。

## <美しい国>

◆作家の三島由紀夫が憲法改正を訴えて陸上自衛隊の市ヶ谷駐屯地に乗り込み、自衛隊の決起（クーデター）を呼びかけた後に割腹自殺したのは、1970年11月25日。今から48年前のことだ。しかして、今やっとな憲法改正の議論と自衛隊の議論が少し盛り上がるようとしているが、さてその行方は……？

◆全国の中学3年生の中から無作為に選ばれた1クラスを、最後の1人になるまで殺し合わせる「新世紀教育改革法」・通称「BR法」をテーマにした深作欣二監督の『バトル・ロ

ワイアル』(00年)は刺激的で、面白かった。また、問題提起としても十分な意味と説得力をもっていた。その深作欣二監督の遺志を引き継いで息子の深作健太監督が完成させた『バトルロワイヤルII／鎮魂歌(レクイエム)』(03年)では、新たに「新世紀テロ対策特別法」通称「BRⅡ法」が制定され、反BR法組織である「ワイルドセブン」がいかなるテロを起こすかがテーマになっていた(『シネマ3』313頁)。また同作は、当時国会で審議中の有事関連3法(武力攻撃事態対処法、改正カ安全保障会議設置法、改正自衛隊法)制定問題と連動するタイムリーな問題提起になっていた。

◆他方、『イキガミ』(08年)は、平和な社会に暮らす国民に対して死への恐怖感を植え付けることによって生命の価値を再認識させるため、「国家繁栄維持法」が制定されているという設定がミソだった。同法は、小学校入学直前のすべての児童に対して「国家予防接種」を打つことを義務づけていたが、そのアンプルには1000人に1人の確率で特殊な「ナノ・カプセル」が仕込まれていた。そして、そのカプセルは18歳から24歳までの若者の体内で、あらかじめ設定された日時に肺動脈内で自動的に破裂し、その命を奪うという、物騒なものだったからすごい。これは、18歳から24歳までの若者は常に「自分は死ぬのでは」という危機感を持ちながら成長し、その危機感こそが「生命の価値」に対する国民の意識を高め、社会の生産性を向上させるという考え方に基づくものだったが、さてその正否は? (『シネマ21』149頁)。

◆それらに対して、本作によると10年後の日本では、「徴兵制」が施行されているらしい。もっとも、本作の主人公渡邊(太賀)は、徴兵制の公示キャンペーンを担当しているという設定だから、徴兵制の施行との整合性は如何に?

◆まあ、20分の短編だからそのあたりのツッコミは避けるとしても、本作はポスターデザインの一掃をめぐる渡邊とベテランデザイナー天達(木野花)の対話に焦点を当てている点がミソ。そのため、渡邊が天達を降板させるという困難な説得に成功し、一新されたポスターが提示されているところで終わる。つまり、そこでやっと暗示的な問題提起がなされるから、それに注目! もっとも、私はそんなまどろっこしい問題提起の仕方には大いに不満。なぜ、真正面から徴兵制の是非をテーマにしなかったの?

2018(平成30)年11月15日記